

# 「千年の都」京都の〈水土〉

## Suido of Kyoto - the “Millennial Capital” of Japan

渡邊 紹裕

Tsugihiro WATANABE

### 1. はじめに

京都は「千年来」の首都である。都市成立後の平安京の時代を経て、動きの大きかった「中世」でも、その後の比較的安定した近世でも、都としてあり続けた。そして、近代に入り「首都」の機能は失ったが、琵琶湖疏水開削などを契機として独自の発展を見せる。そこには集住人口を支える後背地があり、また日本を象徴し、全国に展開する〈水土の知〉の先端地であり中心地でもあり続けてきた。この京都の〈水土〉の形成に大きく関わった「水」のあり方を考えるために、その特徴や歴史的展開を改めて整理することにする。

### 2. 京都の水文環境～〈水土〉の基盤

京都が、平城京から遷都されて、「都」＝平安京と選定された理由には様々あげられているが、その一つである、地形、気候、水文などの「地勢」の影響が大きかったと考えられている。当時の基本的な資源としての水と森林を一定程度確保した「流域」に位置することの必要性がその根幹にある。豊かな森林とそれに支えられた水利の便と、治水の安定性がその要件である。こうした条件を備えたのが京都～平安京であり、以降の日本の歴史は、京都を中心に置く琵琶湖から大坂への淀川軸を中心に展開することになる（竹村，2014）。

京都盆地には、西から保津川、東北から賀茂川、南東から宇治川が流れ込み、南側では、木津川も合流して、巨椋池を中心とする低湿地が形成されている。この河川・地形を巧みに利用した灌漑開発や、治水、舟運は継続して開発された。これは平安京以前からも行われたことで、保津川が京都盆地に流れ込む大堰川には、5世紀頃に渡来人秦氏が葛野大堰を建設し、兩岸の農地の灌漑と、都中心部への洪水流入の防止が図られてきた。

こうした「安定」の一方、海からの距離と、平野の規模から、京都盆地内で都の食料や資材を賄うことは叶わず、必然的に流域外周辺地域の豊かな森林やその間の盆地群、さらに「近つ淡海」（おうみ＝近江）としての琵琶湖、などに依存する構造が仕立てられていくことになったと考える。限られた資源を巧みに集積し活用する都と、その供給地として支える周辺の後背地の、安定した関係である。筆者は、この「乏しい京都」が「巧みの京都」の根源であり、都と周辺との「関係性」が広く京都の〈水土〉の基本であると考えられる。

### 3. 近世から近代へ～〈水土〉の展開

この安定した〈水土〉は、首都機能の継続の基盤となったと考えられる。京都は、盆地の地下に、大きな地下帯水層があり、その安定して清廉な地下水が、さまざまな食材、飲料、繊維、工芸品などの生産を支えてきた。



図-1 近畿の河川水系と京都(国土交通省資料に加筆)

時代が進んで近世に入ると、海上輸送は国の経済における役割が大きくなり、海に面しない京都の舟運の不備が顕在化した。こうした状況を背景にして、貿易商として活躍し、京都の大堰川など国内の河川開発に携わった角倉了以とその子素庵は、慶長時代(1614年)に「高瀬川」を開削した。鴨川の水を導水し、鴨川西岸を南流し鴨川と合流・分岐し、伏見から宇治川へ注ぐという、延長約10キロメートルの運河である。この高瀬川は、底の浅い高瀬舟によって、京都と、伏見・宇治川から淀川・大坂間の物資の輸送を拡大させた。

この高瀬川は、江戸時代末には、拡大した物資の輸送とともに、人と情報の往来を活性化させ、起点周辺の旅籠や茶店は様々な「暗躍」が展開する拠点となって、「幕末」の舞台となっていった。

明治維新の背景には、関東を中心とした大河川下流平野の大規模水田開発や森林開発の拡大などがあったと考えられるが、何れにせよ、京都は、天皇の東京への遷座によって都ではなくなり、公家らの東京移住や神社仏閣の土地の収用などもあり、その社会・経済・文化の面での「停滞」は明らかとなった。この状況に対して、産業再興を目指しての基盤整備として琵琶湖疏水が開削された。琵琶湖からの導水という新たな周辺との関係強化である。この内容や意義は別稿(小野, 2018)で詳述されているので、ここでは省略する。

#### 4. 現在の京都～〈水土〉の継承

琵琶湖疏水による安定した用水の供給は、地下水に依存した生活用水の衛生条件の向上をもたらしたほか、発電、灌漑、舟運などにおいても、大きく貢献したといえる。現在では、発電や灌漑の意味は小さくなっており、舟運は完全に他の手段に代替され、近年は「観光通船」がなされるだけだが、上水道の水源としての役割はなお大きい。

京都は、水源を基本的にほぼ全て琵琶湖に依存することから、上水の水質は、琵琶湖のそれに大きく関わることになる。琵琶湖では、集水域での人口増加や経済成長、圃場整備などの進展と排水量の増大などで、富栄養化と水質汚染は昭和になって進んだ。1960年代入ると農薬汚染による魚の大量死や、富栄養化が原因と考えられる水道の濾過障害と異臭味や、藻の異常繁茂などが発生した。1977年には淡水赤潮、1983年にはアオコ、1989年にはピコプランクトンの異常繁殖が、それぞれ初観察される事態となった。こうした事態に対して、京都では、ボトル水の利用や家庭での浄水器利用が拡大し、地下水利用の復活がなされる一方で、上水担当部局では浄水のレベルを上げる様々な対応がなされ、現在では、その水質や味を売り物としてボトル詰めにした「疏水物語」を災害備蓄用にも普及するほどになっている。

#### 5. おわりに～京都の〈水土〉の課題と展望

京都では、通船を契機に、琵琶湖疏水の意味や役割の再考が話題となっている。一方、地下水への「回帰」とともに、地下鉄開通による「枯渇」も問題とされ、洪水排除や下水処理の暗渠の建設と管理も課題となっている。こうした水循環保全の見直しの中、文化観光都市、そして「環境都市」としての、水との関わり～「水文化」のあり方を再考することが課題となっていて、第3回世界水フォーラム(2003年)が開催されたときに発出された「京都水宣言」の意義を継承再考してさらに発展させる取り組みを進めるべきと考える。

#### 参考文献

竹村公太郎(2013)日本史の謎は「地形」で解ける。PHP

小野芳朗(2018)琵琶湖疏水の開削と京都の近代化。農業農村工学会平成30年度大会講演会講演要旨